発行所
東京都江東区
越中島3－3－1
東京都立第三商業
高等学校同窓会
編集　同窓会事務局
電話　(3641)0380

三商同窓会報

No.39

ご挨拶

学校長　青木孝雄

夏本番の今日この頃、卒業生の皆様には、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

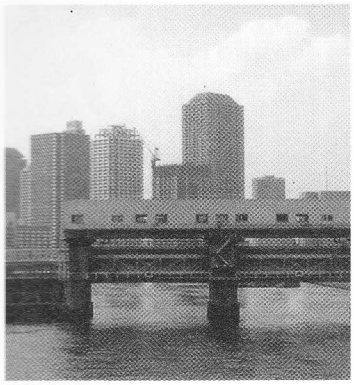
日頃より母校の教育活動にご支援・ご協力頂きまして、大変有り難く心より厚く御礼申し上げます。

私は、本年四月一日を持ちまして、都立台東商業高等学校より、本校校長に赴任致しました。どうぞよろしくお願いいたします。前任校の台東商業高校は、浅草の繁華街から十分程離れた古い街並みの中にあり、地域と様々な関わり合いのある学校でした。浅草では、春は隅田川沿い桜祭り、夏は隅田川の花火、三社祭り、鳥越神社の祭礼、秋はほおずき市、冬の羽子板市と、一年中催し物が行われています。

三商の環境は、学校の南に運河があり、運河の対岸には高層マンションが林立し、浅草とは大変趣を異にし、落ち着いた情緒のある町に感じられました。運河を行き交う貨物船や、夜運行さる遊覧船が、この地域独特の雰囲気を醸し出しています。

都立第三商業高校全日制は、現在生徒数六〇二名、教職員六十八名、クラス数は各学年六クラスで合計十八クラスです。また教職員の協力で、様々な取り組みを実施しております。

平成十二年度からは、ホームルーム定員三十五人学級を、都の試行校として実施しております。将来は都立高校の全ての専門高校で実施する計画になっています。三十五人ホームルーム学級実施において、きめ細かい指導を徹底し、在校生に充実した、一人一人の生徒の実態に即した教育を展開すべく取り組んでおります。また本校では、中国からの帰国生徒の受け入れ学級を設置し、帰国子女の教育を展開しております。日本語の苦手な生徒に、本校の他の生徒と同等の教育を実施し、成果を上げています。現在十八名の優秀な生徒が熱心に学習に取り組んでいます。生徒の中には日本語がほとんど話せない生徒もおり、担当の先生方は大変な苦労をしています。卒業までには流暢な日本語を話せるようになり、上級学校へ進学したり、社会へ出て頑張って欲しいとおもいます。



また生徒の企業体験（インターンシップ）を導入し、地域の商店街の協力を得て、実施しています。生徒は目を輝かせて実習を行っているようです。平成十二年度は十五名の生徒が参加する予定です。この体験をとおして勤労観、職業観を是非育成し、三商生としての自覚と誇りを示して欲しいと思います。

家庭科の授業では、保育の体験授業として、学校近くの保育園で体験的実習を予定しています。

このような体験授業をとおして、貴重なものを体得して欲しいと思います。

夏季休業中、ボランティア活動を毎年実施し地域との連携を深めています。地域の老人施設を訪問し、様々な活動をとおして、お役に立っています。この体験を通して、生徒には社会福祉問題に関心を持ってもらい、また老人介護の実態を直接学び、今後の自己の人生に役立ててもらいたい。

本年夏の全国珠算大会に、個人の部で、本校の生徒が出場します。大会での生徒の活躍が大変期待されるところです。三商のためにも頑張って優秀な結果を出し、三商の名前を全国に知らせて欲しいと思います。

このように本校の教育活動を積極的に展開し、三商の存在をPRしています。様々な教育活動の展開は、教職員が生徒を主体と考え、日々教育活動を展開している熱意の現れであると、大変感謝しております。また日頃、様々な側面から同窓会の皆様にご支援頂いているからであると、心より感謝しております。

学習指導要領の改訂に伴い（平成十五年度入学生から完全実施）、現在、本校の生徒に合致した新しい教育課程の編成に取り組んでおります。平成十四年度からの週五日制実施を踏まえ、様々な角度から検討し、本校の生徒の実態に即した、都民の期待に十分応えられる学校教育を展開する必要があります。その中で「総合的学習」「教科情報」が新しい科目として導入され、その内容も検討しております。

先日同窓生の好川栄一さん（五期生）がお見えになり、卒業時同期の方々が書かれた卒業論文をお持ち帰られました。皆様にお渡しするそうです。現在もまだ相当数図書館に保存されていて、全て卒業生の直筆であり、ハードカバーの製本がされ、大変素晴らしい内容でした。いくつか例を挙げますと、「市場要論」（三期生沼田定男氏）、「外国貿易政策」（四期生吉野良二氏）、「近世日本経済史概論」（六期生山本四郎氏）「小売商の経営改革論」（七期生中野裕氏）等、そのほか数々のテーマで論文が書かれていて、当時の授業の程度が相当高度であったと想像できます。これらの蔵書は三商の大きな財産と思われます。今後大切に保管していきたいと考えております。三商は同窓会の中に、いろいろな団体があります。それぞれの期の同期会、会計士の集まりである三商会計人会等があり、親交を暖めておられます。大変羨ましく思います。同窓生の皆様の高校時代が大変充実し、何事に対しても熱心に取り組み、その結果、それだけ思い出が多いためであると考えます。今後もそれぞれの会の発展をご期待します。

最後に同期生の皆様がお元気で、様々な分野において、ご活躍されますことを心からお祈り申し上げます。また同窓生の皆様が、今後も三商をご支援・ご指導頂けますよう心からお願い申し上げます。

ご挨拶

会長　神谷武志

同窓生の皆様益々御健勝お喜び申し上げます。母校も津守校長を送り台東商業から青木校長を迎えました。それにしても最近の校長在任期間の短さ、曾ての故吉沢、今村校長先生迄とまでとは言わないがせめて五年間位はと思います。都教育長は各校の平均化を図るつもりだろうが、それでは特色ある学校は育たないのではあるまいか。さて同窓会ですが、時代の趨勢に従い一部下記の様に会則を改訂致し度と存じます。

記

一、最高議決機関を「総会」から「評議員会」に変更

二、理事、評議員の役割の明確化

三、会計は各年度単位で収支均等を計る

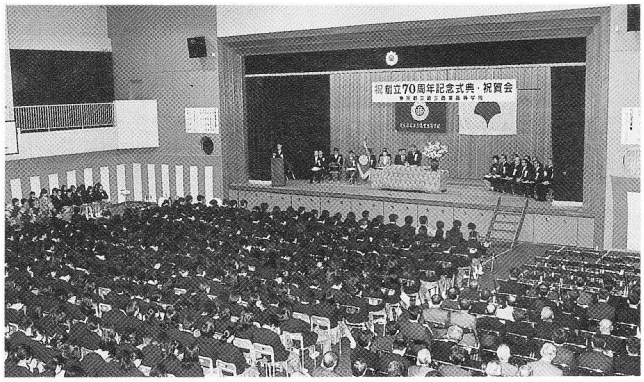
超低金利の影響を受け会財政は年毎に窮屈化しております。徹底的に経費の節減に努め、反面増収の度を計る為、取り敢えず

一、総会参加費を五千円に値上げ

二、理事会、評議員会の飲食費は自弁

と致しました。

又八十周年協賛金についても今年から開始致し度と存じます。タダ初期卒業の期は高齢化しボツボツ解散の期もある様ですが、精々ガンバッテ御協力お願い致します。同期生会の結成してない期、又余り活動の不活発な期などはこれを機会に母校の為にご協力戴き度と存じます。



輝く伝統よ、永遠なれ

前校長　津守四郎

平成九年四月に都立第三商業学校長を拝命し、以来三年間教職員とともに、「都立三商」のあるべき姿を求め続けて参りましたが、この度、去る三月末日を以て、定年により退任することになりました。

同窓会の皆様には、陰に陽に力強いご指導・ご支援を賜り、心から感謝いたしております。なかでも三年前の十一月、本校の「七十周年記念式典」開催に際しては、都築前会長様を始め同窓会の皆様の多大なご尽力を賜りました。お陰で厳粛且つ盛大に挙行でき、「都立三商」の歴史に新たな節目を刻むことができました。

また、生徒・教職員共々「都立三商」のよき伝統を学ぶ絶好の機会にもなりました。ここに改めて厚くお礼申し上げます。

「商業教育」は、社会の急激な変化を目の当たりにし、より重要性を増しております。百年を優に越す「商業教育」がこのように発展し続けられたのも、商業高校で学ばれた卒業生諸氏の社会での貢献という輝ける実証があればこそであります。今後ともご健康には十分に留意しつつ益々のご活躍を祈念しております。

この三年間、同窓会の多くの皆様とお話する機会が多くあったことは、大変得難いことでありました。そして、心を洗われるように何時も、心に残ったのは卒業生の母校に対する愛着心であります。

この尊い母校愛に応えるためにも、輝く伝統を糧に「都立三商」の教育の一層の充実と、皆様の旧に倍するご支援をお願いし、退任のご挨拶といたします。ありがとうございました。

たより

平成12年　離任等教職員一覧表

職名	担当	氏名	転出先	赴任在籍期間
教諭	国語	冨田浩康	都立研究所	S 59.4.1　15年
〃	〃	山口勝生	向島商業(定)	H 2.4.1　10年
〃	地歴	堀井弘一郎	両国	H 5.4.1　7年
〃	数学	小川達夫	台東商業	H 9.4.1　3年
〃	家庭	赤坂房子	小平南	H 3.4.1　9年
〃	商業	長船孝明	都庁出向	S 63.4.1　12年
〃	〃	山田清美	上野忍岡	H 7.4.1　5年
事務	主事	小町美織	志村第三中	H 8.4.1　6年
〃	主事	築尾康司	清新第二中	H 7.4.1　5年(全日制のみ)
〃	主事	古久保忠行	紅葉川	H 7.4.1　5年
〃	嘱託	岸川弘彦		H 8.4.1　4年
〃	用務	栗原宏幸	大崎	H 11.4.1　1年(全日制のみ)
〃	用務	森田芳夫		H 10.4.1　2年

讀賣新聞
米人間衛星に成功
月面を三周半
グレン中佐回収艦に
美しいながめだ
すべて計画通り
ソ連に追いつく

スタートからゴールまで

冨田浩康

◆一九六一（昭和三十七）年のはじめ、門前仲町で都電を降りた。木造の商家が多く目について、（あぁ深川だなぁ）と思いながら、伯父の書いた地図を頼りに月島の方へ歩き始めた。清澄通りから角をまがった三商前の道は、商船大学の建物と工場ばかりで、緑も見えず、木枯らしが白く砂塵を巻き上げていた。えらいところにある学校だな……と見渡したとき、あの時計塔が見えた。

小網町で運送会社をしていた伯父のところの従兄は二人とも三商で学んだ。世話好きの伯父は、五年間も三商のＰＴＡ会長をやった。

「おれは三商に顔がきく。紹介状を書いてやるから行ってこい。」

都の教員採用試験にうかったものの、どこかの校長さんから声がかからなければどうしようもない、校長専決の時代だった。我が家では、いつも「話し半分」といわれていた伯父の紹介状だったが、藁をもつかむ思いで、出掛けてきたのだった。

「いやぁ、いつも伯父さんにはお世話になっています。」とにこにこ挨拶された校長は、私の履歴書を眺めながら、「今年は国語は空かないんです。でもあなたの母校の校長先生は校長会の会長ですよ。こちらにお願いするほうが近道じゃないかな。」と話してくれた。

このアドバイスのおかげで、私は板橋のはずれにある新設校に奉職することになった。三十八年前の春だった。

◆それから二十二年間、「この学校で始まって、この学校に骨をうめることになるのかな。」そんな悟りの境地（？）になりかけていたとき、一九八四（昭和五十九）年都教委は強制異動を強行した。異動先は、奇しくも三商だった。

二十二年ぶりの門前仲町は、

すっかり様変わりしていた。三商生も黒の背広の制服は変わっていなかったが、お皿の帽子は頭にのっていなかった。女子がむやみと多かった。そして、あの時計塔はなく、白い病院のような感じのきれいな校舎になっていた。

先生方は暖かかった。私は、組合の役員もやり、組合活動家として都立高校の中では「悪名（？）」が知れ渡っていた。着任式のあと、「ひょっとして、先生が、あの冨田先生ですか。」と真顔で聞きにこられた先生もおられた。そんな私を、違和感なく迎えてくれた。自分たちが、この三商の教育に責任をもつのだ、という気概をもった教職員集団は気持ち良かった。ただむやみと厳しいしつけ教育には、正直いってカルチャーショックを受けた。当時流行っていた引きずりそうな長いスカートは、職員室に連れてきて、短く切らせ裾かがりをしアイロン掛けを終わるまでは教室にいかせなかった。放課後、ロッカーや机の中に教科書などが残っていると没収、ロッカーの使用禁止だった。

しかし、その一方で生徒の自主活動は活発だった。五月の連休明けから急にクラス担任をもつことになったのだが、総務・議長を中心にクラスは運営されていた。体育祭や三商祭も実行委員会がすべて仕切っていた。しつけと自主活動という相い矛盾する教育活動に、教職員集団として高い要求を突き付けて、指導しきっていく――このきわどい弁証法が、三商教育の根幹を流れていると感じるのにしばらく時間が掛かった。

◆あれから十六年、とうとう定年の年を迎えてしまった。八〇年代、生徒たちは私を「トミー！」とよんだ。九十年代になったら「トミじー」に変わり、最後に担任した一年生たちは「じー」「じいさん」だった。その生徒たちが、三月の修了式の日、「じいさんの卒業式」をやってくれた。手作りの卒業証書をもらい「先生ありがとう」というお別れの歌につつまれたとき、不覚にも涙がぽろぽろこぼれた。三商生の下町っこらしい、暖かさと気っ風のよさは、変わっていない。

しかし、しつけ教育の意味を受けとめ、自分たちなりの学校生活を創っていこうという気概は、残念ながらかっての三商生とは比べものにならぬくらい衰えている。自主活動も、先生方のてこ入れとリードが欠かせないものになっているし、HRにいたってはほとんど担任の先生の指示や報告、総務・議長が毎日のクラスの生活を仕切るということは望むべくもなくなっている。

三商教育の弁証法を守っていくことが難しくなっていることは事実だ。でも、ここで引き下がっては、他の商業高校と同じようにしつけの行き届いた従順な生徒を育てるだけで、自主的・自発的にびしっと行動できる生徒は育たない。どうするか？今、三商の先生方は、必死に方向を模索している。

この十六年、変わらないものがある。三商に責任をもつという教職員集団の気概と、下町っこらしい暖かさと積極性を持った生徒たちだ。これを生かしきる核はなんだろう。高校改革がいわれている中、三商が新たな道を切り開いていくことを切に期待している。

◆それにしても、教員になるときから、定年で教員生活にピリオドをうつまで、三商にはお世話になりっぱなしだった。三商を思うとき万感胸に迫るものがある。

定年後の再雇用先は、教育研究所だった。現場とは質の違った、生徒の声のしない教育の場で、いささか戸惑いながら毎日を送っている。週に一、二回は、「携帯」で二年生になった生徒たちから電話が掛かってくる。「じー！元気ー？真面目に働いているかぁ？」そんな生徒たちの励ましを力に、新しい職場でぼちぼち頑張っていこうと思っている。

都庁第一庁舎 二十六階より

長船孝明

同窓生の皆さんお元気ですか。私が三商へ着任したのは昭和六十三年四月。年度としては昭和の最後、後楽園球場が東京ドームに、青函連絡船が青函トンネルに、宇高連絡船が瀬戸大橋へと変わった年に着任いたしました。以来十二年間、明るく素直な生徒諸君、いつもご支援・ご協力をいただた保護者の皆様、これまで三商を守り育ててくださった同窓生の皆さん、生徒のことを第一に考え、三商の発展のために骨身を惜しまない教職員の方々に支えられ、何とかここまで参りました。

三商に着任してからは、元号が昭和から平成に変わり、奥尻島の地震、三原山・雲仙普賢岳の噴火、阪神淡路大震災など数多くの出来事がありました。平成六年に引率した修学旅行では、夜の班長会議を終えた直後に、釧路沖で地震があり、一瞬肝を冷やしました。校内では都立高校初の会計科の設置、簿記合宿の実施、制服の改訂、航空機を利用した修学旅行、公開講座の実施、学校五日制の実施、六日町山寮の廃止など様々な面で激動の十年でした。また、ここ数年は景気の低迷により求人数が激減し、厳しい就職戦線を強いられてきましたが、幸いなことに同窓会の皆さんのお骨折りもあり、何とか乗り越えることができました。

私は現在、平成十二年度長期社会体験研修生として、東京都生活文化局消費生活部企画調整課参加推進係に派遣させていただいています。今まで経験したことのない職場で、東京都消費生活モニターの運営（消費生活行政施策への反映と消費者問題の普及啓発を目的にアンケート調査や研修会の実施）と、循環型社会を目指す消費生活推進協議会（グリーンコンシューマー東京ネット）の運営（環境に配慮した商品等の積極的な選択により、市場を変え、社会を転換していく都民運動の推進組織）に関する業務に取り組んでいます。これから一年間多くのことを学び、来年四月からはここで学んだことを教育の現場に活かすことができればと考えています。

都庁勤務とはいえ、原籍は三商です。時々学校へも顔を出させていただきます。

今後ともよろしくご指導の程お願い申し上げます。

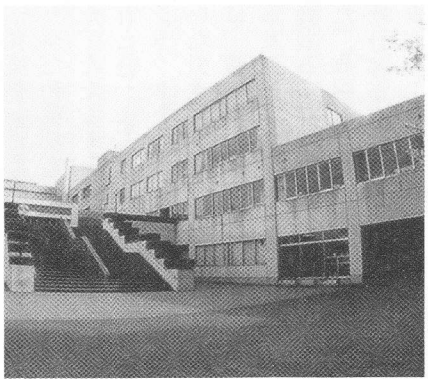
お世話になりました

赤坂房子

皆さんお元気ですか。九年間勤めた三商を離れ、ただ今、小平南高校で頑張っています。私が着任した頃の三商は、まだ男子は黒のスーツ、女子は紺のジャンパースカートの時代で、ちょうど会計科一期生入学の年でした。

東京も広いもので、今は校舎もけやきといちょうの巨木に囲まれ、時おり大きな富士山を窓ごしに授業をしています。思い返せば運河に流れる材木の風景が、とて

もなつかしく思います。また潮のかおりや橋にたつ釣り人、かもめの姿も今では、遠い昔のように思えます。三商での水に囲まれた生活は、街に潤いを与えるだけでなく、人の心も豊にしてくれるものだったと今さらながら感じます。着任した時の新鮮な気持ちを今、思い出しています。これからまた、自然の中で四季の移り変わりを楽しみながら前進していきます。皆様お世話になりました。今後ともご鞭撻の程お願いいたします。



ありがとうございました

山田清美

平成七年三月、大学卒業を間近に控えていたある日、一本の電話が鳴りました。その電話こそが「東京都立第三商業高等学校」からの電話でした。初めて三商にうかがった日、越中島の駅の前で右に行ったらいいのか、左に行ったらいいのかわからず、しばらく迷っていたことが昨日のことのように思い出されます。

四月、晴れて東京都立第三商業高等学校に勤務することになり、それから五年間にわたり、お世話になってまいりました。着任当初は、今までとは全く違う環境に圧倒され、何をしたらいいのかわからず、ずいぶんご迷惑をかけたことと思います。

分掌は、生活指導部で二年間、それこそ生徒指導面や学校行事等において勉強させていただきました。そして、念願の学年担任。温かい学年団と明るく人なつこい生徒たちに囲まれ、三年間無我夢中でやってまいりました。入学式から始まった三年間は、体育祭、三商祭、移動教室、修学旅行などの各行事や、授業、進路活動、日常の何気ない生活・会話など、本当に数え切れないたくさんの思い出でいっぱいです。特に卒業式のあとのあの何ともいえない思いは、何にもまして代え難いものでした。このような思いを持つことができたのも、いつも私のまわりに、心温かい先生方がいて、常に支えてくださり、助けてくださったおかげだと感謝しております。

三商は私の教員生活のスタートの場であり、本当にさまざまなことを学ばせていただいた大切な場でもありました。だからこそ三商での五年間は生涯忘れずにいたいと思います。大好きな三商で学ばせて頂いたこと、経験させて頂いたことを今後の学校生活でも活かしていけたら思っております。

「袖触れ合うも他生の縁」、この言葉は卒業していった生徒たちに送ったものですが、今は、私自身がよく心に留めておきたいと思います。三商で出会った方々や三商で学んだことを大切に、また、これから先の新しい出会いや新しく学ぶことを楽しみに、一生懸命がんばっていきたいと思っております。五年間、本当にありがとうございました。

お世話になりました

小川達夫

私は三年間という短い間しか在任することができませんでしたが、三商は今まで勤務したどの学校よりも、思い出深い学校となりました。

職員室の雰囲気は明るく、教員も個性的な方が多くおられ、毎日を楽しく過ごすことができました。また。生徒たちも素直で元気がよく、授業やホームルーム、行事などを通して色々な思い出をたくさん残すことができました。なにより伝統ある商業高校で卒業生を送り出せたことを、教員として誇りに思います。

また、それまで狭い校舎、狭い校庭の学校ばかりの教員生活だったので、初めて三商を訪れたとき、広い校庭・豊富な数の教室に驚いたことも忘れられません。さらに、教室からは運河も眺めることができ、心が癒されました。

三商ではやり残してしまったことが多くあり残念ですが、その分新任校でも頑張りたいと思います。多くの方にお世話になったことを感謝し、三商のますますの発展を心よりお祈り申し上げます。

先　輩

今後ともご指導
ご鞭撻のほど
よろしくお願いします。

2000年 卒業生一同より

四期生会

黒須康介

平成十二年四月八日　例年の通り新丸ビル地下ポール・スターにて四期生会を開催するも毎年人数がへり今年は三十二名になる。来年も元気で集る事を約して散会する。

三商五期生の会

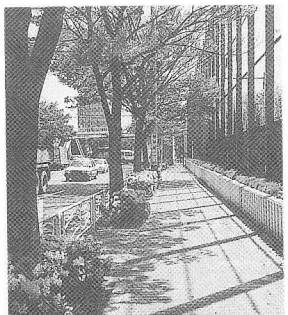
好川栄一

平成十一年十一月十一日正午、三商五期生の会を催しました。場所は東天紅の恵比寿店でした。東天紅は三商五期生の故小泉一兵衛君が創建した料理店ですから五期生にとってはご縁のある会場でした。

出席者は二七名です。卒業当時の五期生の総数は二五四名、現在交信可能な人は八二名、その中の出席者二七名でした。

まず校歌・都の空を斉唱。それから二七名の各人がそれぞれ一、二分のスピーチをしました。戦争と老いの病で多くの友を失いましたが、七九歳、八十歳になっても五期生は元気に語りました。そのあとビールと紹興酒でみんな生き生きとした笑顔になり食事をたっぷり楽しみました。

もう一つうれしかったこと、それは五期生が在学時に書道を教えて頂いた高橋昇一先生（栃木県佐野市ご在住）から貴重な短冊を頂いたことです。九十歳になられた高橋先生が短冊の一つ一つに虚子、蕪村、芭蕉、子規などの俳句を昔とかわらぬ若い筆致でお書きになって合計二九のその短冊を先生の娘さまが佐野市から馳せつけてお届け下さったのです。五期生は各自が好み選んだ一つずつの短冊を頂戴しました。五期生が在学した当時の諸先生のうち今お元気なのは高橋先生ただおひとりなのです。まことに貴重な短冊でした。



七期会

村田邦夫

七期会の懇親会を例年の通り昨年十月の第四金曜日の二十二日午後四時から日本橋たいめい軒に於て開催した。出席者は青木敏治・市村陽・川口三蔵・黒田喜一郎・柴田定一・寺田光逸・中島清也・車重三・原田伸一・松井一郎・吉井瑞雄・村山富太郎・浅川喜平・稲村繁・荒井貞次・熊谷兼太郎・小平安雄・鬼頭誠一・中川哲・長坂源一郎・高木菊次郎・服部博吉・福田健一・丸山誠一・横山華久郎・外川博・山口昌雄・横山隆一の皆様と私の二十九名であった。例年通り食前感謝詞で開会、校歌で閉会する前に今年は卒業式で謡った「鉢の木」を試みた。今回も出席を予定し常連であった奥住市夫君が当日の前前日に急逝し、今回も伊丹市から出席楽しく談笑した熊谷兼太郎君が二ヶ月余の後の去る一月四日急逝された。七期会も櫛の歯が欠ける様に淋しくなって行くが、大方の出席者は元気で会は盛り上り、常連の欠席者も居られるので、殆どの方が満七十九歳の傘寿を迎える今秋は例年通り十月第四金曜日の二十二日に懇親会を開催したいと考えて居る。

八期会

野見山芳久

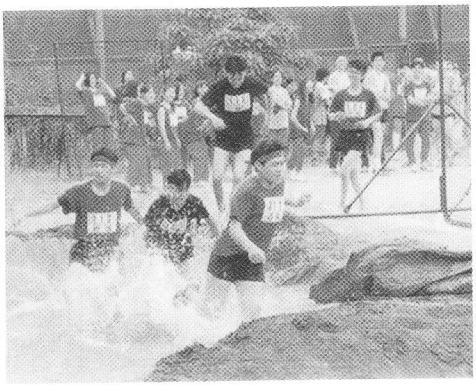
十月二十七日（水）昨年に引き続いて三商八期会を開催した。幹事には西山隆君が体調をくずされた為、神谷君と打ち合わせて野見山が設営した。場所は九段下のホテル・グランドパレスで正午より約二時間の予定で遠路（北海道）より出席された安斎一郎君の乾杯の音頭で開会し、和気あいあいのうちに昔話に花をさかせて大いに盛り上った楽しい会であった。この度の会合の案内状は住所の判っている九十五名に郵送し、出席者は十九名、欠席者五十一名で返信のない者二十二名、住所不明のため返送された者一名であった。尚、次の方二名が亡くなられたとの返信をいただいた。

関口衛一君（平成十一年五月死亡）

21　期

8　期

7　期



高橋盛一君（平成十一年八月死亡）心よりご冥福をお祈りいたします。

昨年は出席者が二十四名であったがこの度は五名減少して十九名であったのは残念であった。年々同窓の仲間も高齢化して体調が良くない為に欠席という返信が増えてきてるのはやむを得ないとは思うが淋しい限りである。来年は我々八期生が卒業して六十年を迎える節目の年です。各自健康に留意して次回にはもっと大勢の方が出席されてお目にかかれることを願っております。

尚次回の幹事は篠塚健治君に決定しました。

十期会

荻野文雄

平成十二年度の十期会例会は、五月二十七日（土）正午から、古田泰治郎君経営の神田淡路町の割烹「萬代」で開催した。来賓として笹岡恒三先生のご臨席をいただいた。

江戸以来、「神田」という独特なひびきをもつ町名の此の一帯は、伝統と尖端が混在して独自な都市エリアを形成している。震災復興のモダニズム・デザインの聖橋は神田川を跨ぐ部分が優美なアーチ形で知られている。橋上からお茶の水の渓谷をのぞむ眺めは数少ない東京の美観といえる。橋を渡ると緑濃い樹木におおわれた湯島聖堂。江戸最高学府の跡は旧状を保っている。その裏が神田明神。神田祭は日枝神社の山王祭と共に江戸二大祭と謳われた。駿河台から淡路坂を下ったところに「藪そば」と隣り合って「萬代」がある。嘗て連雀町と呼ばれた此の辺りには古き良き東京の味を伝える名代の食物屋が軒を列ねている。昭和前期までは須田町は市電（都電）の要衝として路線が交差していた。現在、交通博物館に萬世橋廃駅の足跡を、中央線煉瓦高架に甲武鉄道の名残りを見る。万世橋を渡ると電気製品安売市場として海外にまで知られた秋葉原。IT革命の到来と共にパソコンなどハイテク機器の販売前線としてますます賑わっている。ここにヤッチャ場の愛称で親しまれた神田青果市場があったとは行き交う若者は知るまい。

例会は小谷松淳郎君が司会し、先ず物故者級友の冥福を祈って黙祷。新旧世話人代表の関岡扇令君（一組）と荻野（六組）が挨拶。事務局の福田猛君から収支状況と、墓参会は、今村直人先生は六月四日、清田榮一先生は十月七日を予定している旨の報告があった。八十六歳の笹岡先生からは、暗いニュースが多い現今、三商教師をしていた若き時代を懐かしく想い出す、という趣旨のご挨拶があった。石川喜一郎君の発声で乾盃、宴は談論風発、暫し浮世を忘れて愉快なひとときを過ごした。二時、来年の再会を約し、木村一雄君の手締めで散会。

出席者　二十九名

飯島武敏　石川喜一郎　石丸豊
多郎　岩佐一男　大森文吉
岡本幸金　加島精四郎　加瀬善太
郎　加藤茂　神谷恭正　木村一雄
小池善四郎　小谷松淳郎　佐藤東
吉　柴田栄一　白石實　関岡扇令
竹田一郎　田中利雄　戸枝義明
福田猛　古川恵一　古田泰治郎
帆足誠　正藤正雄　持田政雄
山口正人　山崎順三　荻野文雄

二十一期会

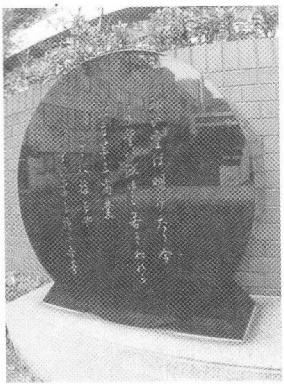
富張勝三

平成十一年九月二十五日牡丹町ホテルリンクスにてお彼岸がすぎても夏日という暑い日に矢島幸先生、竹田一郎先生、小暮敏雄先生の出席を頂き出席者八十名にて開催致しました。

卒業して四十五年、今世紀の最後の同期会を母校のある深川で開催致しました。

地元ということで早く来て新校舎を見学し記念写真を写す事が出来ました。二十一期は二年に一度二つのクラスの幹事によって開催しております。

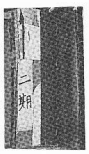
三商の同窓会総会の出席と日比谷公会堂で行われます東京校歌祭の参加をお願いし、次回も元気で会うことを約束し解散した。



投稿

五期生の卒業論文

五期　好川栄一

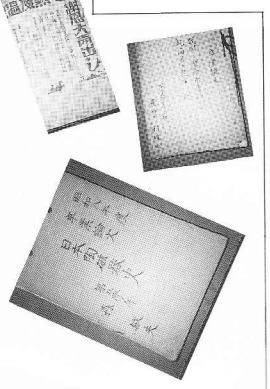


本年二月十七日に財団法人東京三商会の用事で母校三商へ伺った折に、三期生の都築健一さんに案内され図書室に行きました。そこに一期生から七期生までの卒業論文がずらりと並べられているのを見てびっくりしました。約六十年前に書かれたものです。懐かしい思い出が胸いっぱいになりました。どれも同じ表紙に綴じられていて、背に論文の題名とそれを書いた生徒の名が金文字で記されています。

すでに亡くなった五期生、今でも元気な五期生の名が次から次へと見られました。ぱらぱらっとめくってみると、いずれも実に几帳面で正しい字が原稿用紙にびっしりつまっていました。五期生の当時の生真面目さがしのばれて誇らしく感じました。

こんな貴重な宝物はそれぞれご当人に返してあげればと考えてその後、校長先生に相談申し上げたところご快諾を得ましたので、さし当たり四十六名分を選んで好川の事務所へ送っていただきました。

さあ、これから四十六名各位あてに送ります。



吉田嘉七氏の戦争詩

十期　荻野文雄

三商の同窓生には詩人が多い。戦後現代詩を代表する詩人の田村隆一氏（八期）に対し、「ガダルカナル戦詩集」の作者、吉田嘉七氏（四期）の名は忘れられてから久しい。この格調の高い戦争詩は今や神田古書街でも発見できない。

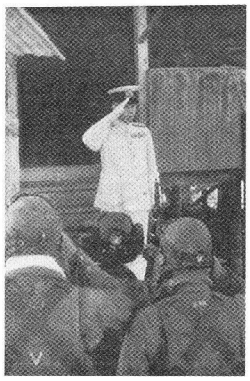
吉田さんは、「万葉集」の文庫本を唯一の書物として携行して太平洋戦争に出征されたという。昭和十七年三月のジャワ島（インドネシア）敵前上陸後の行軍をうたった「歩兵前進」が、報道班員の詩人、大木惇夫に認められて陣中新聞に載った。

「歩く　歩く　ただ歩く　夜も歩く　昼も歩く　烈日のジャングルを歩く　埃だらけの田舎道を歩く　何処でも歩く　どしどし歩く　汗を流して歩く　歯噛みしめて歩く　田んぼの泥を踏んで歩く　道路に倒した大木をまたぎ　破壊された橋梁では胸まで水に漬けて　ただ歩く　軍靴の火と燃えるまで歩く　戦車のまだ来られぬ道を

戦車の如く足で歩く　まめは出来てはつぶれ　汗もは身体一ぱいになっても　とにかく歩く　物も言えなくなるまで歩く　飯がなくても椰子の実を吸い　田の水で口をすすぎ　炎天のジャバ(ジャワ)を歩く　食い込む背のうを肩でうけとめ　熱した銃身を無理にも荷って　ただ歩く　歩く　意気で歩く　気合で歩く　何でも歩く　恐れず歩く　この足を　誰がどうして止められるか　見ろ　歩く　歩く　ただ歩く」

当時、この戦争詩は内地の新聞にも紹介された。私は作者が三商の先輩ということもあって強烈な印象をもった記憶がある。

太平洋戦争の帰趨が決定されたのは、昭和十七年八月の進攻から始まり翌十八年二月の撤退で終ったガダルカナル島作戦である。戦場は熱帯の密林、制空権が奪われ、補給は続かず、全てが日本の国力を越えた。戦死者二万、うち一万五千が餓死。悲惨な「餓島」攻防戦の実態を後世に伝えるものは、如何なる戦史・戦記にもまして、鋭い言語表現で、ひたぶるに、戦う兵士の臨場感をもった叙事詩、吉田嘉七曹長の「ガダルカナル戦詩集」を措いてはないとおもう。



「敵地に眠る戦友に。大君(おおきみ)のみこと畏み、征き征きては るかなる海原は椰子の島。

今夷(えびす)らがたてこもるかの島にわが戦友は眠るかな。目くるめく常夏のジャングルの奥深く突撃し、再び帰らざるなり、わが戦友は。(中略)われにつづけと、椰子に鳴る風のおとには夷らをなべて砕けと、君は尚叫ぶかな。必ずや撃ち撃ちて、今はただわが胸に刻みたる君がみ名、かの土にいとしるく書きなして御墓標(みしるし)はうちたてん。たてまつる花もなく、うっふして、そのままに草むせるわが戦友よ。」

―前線にて一勇士の詠える―というサブタイトルをもつ詩集はもはや日本の勝利の見こみがなくなった昭和二十年二月、戦意昂揚の意図をもって毎日新聞から出版された。しかし、この詩集から、大本営発表とは異なる悲痛な前線の状況が看取され、特に兵士として召され、ひとりの日本人として死と直面する時をまつ青年たちの情念に与えた影響は計りがたい。井上光晴の小説「ガダルカナル戦詩集」には、燈火管制で黒い布をかけた灯の下に顔を寄せて、ただ一冊手に入ったこの詩集を読む学生たちの姿が描かれている。

戦後、吉田さんは次のような詩を「ガダルカナル戦詩集」に追補された。

「国の為だと信じこみ　ジャングルの落葉の下で朽ちてゆく　米も食わずに戦って　ぼろぼろになって死んだ仲間達　遠い遠い雲の涯に　たばにして捨てられた青春よ　今尚太洋を彷徨する魂よ　俺達の永遠に癒えない傷あと」

吉田さんは平成九年九月五日、心筋梗塞で亡くなられた。享年七十九歳。最期のときまで気力が萎えなかったという。

昭和十五年五月三日

十期　竹田一郎

昭和十二年四月、憧れの府立第三商業学校に入学して四年め、われら十期生はこの年、昭和十五年四月、四年生に進級した。

初代校長、吉沢徹先生の高潔なる人格の薫陶を受け天下に名だたる有名校に入学できた喜びに浸り、一意専心、勉学に運動に邁進して来たわれわれは二年生の終り、昭和十四年二月二十七日、先生逝去の報に接したのであった。悲しみに打ちひしがれたわれらは二代校長として着任された今村直人先生のご指導のもとに戦時下、在るべき青少年学徒として、君に忠、親に孝、そして社会の人々に対し奉仕の精神を学び、広く自分たち自身の進歩向上に勤めるべく努力を傾注したのである。

既にして昭和十二年七月、日華事変勃発し、戦火は中国本土に拡大、前年の昭和十四年九月には欧州に戦乱が起こり、次第に物壌騒然となりつつあったが、まだ国内に戦火の波及はなかった。が、次第にわれらの身近に緊迫の度は高まって来ていた。

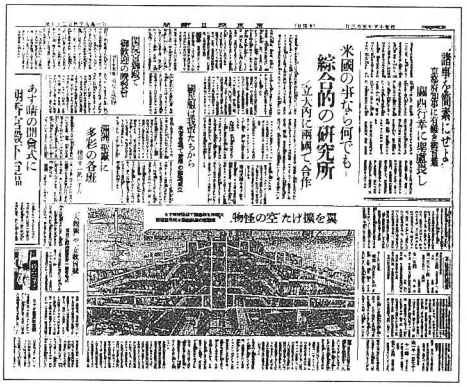
時、恰も表題の昭和十五年は、皇紀二千六百年に際会、年頭から慶祝気分は横溢していた。この年、秋十一月十日に皇紀二千六百年を記念しての皇居前広場に天皇、皇后両陛下臨御のもと盛大な祝典が挙行された。

学校としては翌十一月十一日、全校生徒が明治神宮に参拝して二千六百年奉祝の意を表して国家の隆昌を祈念したのである。

扨、話を本題に戻そう。五月三日の出来事を仔細に記して十期生、四年在学中の思い出を語ることにする。

五月三日は水曜日、府立三商、全校遠足が行われた。全学年がそれぞれ方面別行動を実施したのである。そして当時は戦時下、単なる遠足とは言わず、「鍛錬遠足」と称したのである。質実剛健が合い言葉であった。

この学校のわれらの卒業アルバムの末尾に掲載したわれら在学中の五年史「思ひ出草」(原典は在学中一日も欠かさず記載していた竹田一郎の日記帳)にこの日、五月三日についての記述が現存しているのでこの一文を引用しよう。「思ひ出草」についての解説は、三商創立七十周年記念誌百頁の図版を参照されたい。


米國の事なら何でも
綜合的の研究所
立入内に南鳴で合作
物怪の空たけ
異を擬

「五月三日＝鍛錬遠足(澁谷駅集合〃玉川電車〃身延山別院前〈これより徒歩〉：別院：二子橋：新井台：向丘遊園地：桝形山城址：稲田多摩川〃小田急電車〃：新宿駅解散・行程四里)本日は全校生徒の健康増進、団体訓練、精神鍛錬の目的を以って遠足が行われ四年生は多摩川方面へ向かった。空は全く晴れ絶好の遠足日和であった。」という次第。

制服、巻脚絆に背負袋という軍装。桝形山を目指したA～Fまでの六クラス。三百名は規律正しい行軍に終始。但し行軍中の会話は自由であった。この行程は行政区域で言うと今の川崎市多摩区の踏破に当たる。当時は全く閑静な山村であった。山あり、谷あり、水清らかに大気も澄みわたり緑ゆたかな文字通り景勝の地であった。今でも情景が目前にある。

×　×　×

さて、この日の午後、桝形山城址を過ぎたあたりの頃おい。敢えて言うならばこのあと凡そ戦時中の当時としては少なくとも一般社会では見られない正に神秘的というべき光景が展開するのである。規律正しい行軍に終始していたわれらの隊列を驚かせたのであった。……山あいを出て平坦な道を小川が清らかに流れ右側の畑に沿って曲がりかけたその時、われら二人ずつ並んで縦一列に行軍中の隊列とすれ違った男女の一団がある。この一団は、われらの行く方向の反対方向へ、当然われらの前方から後方に向かって来たのである。

その一団は六十人ぐらいの人数だった。

当方と同じく二人ずつ並んでの縦一列。

然も上品で端正な美男、美女たちの一団。同じ背恰好、身幹順にオトコの子とオンナの子が仲良く手を繋いでの見事な隊列。終始無言。もの静かな態度、物腰。行儀正しい一行。

男女とも茶系統の背広に男子は紺、女子はオレンジ色のネクタイ、コバルト色のお揃いのベレー帽、それにお揃いの靴。すれ違った数分の間、美しいその一行に少なくとも筆者は息を呑み、こころを奪われた。

戦時中のことである。背広にネクタイ姿はわれらも同じだったが、この一行、男女が手を繋いで仲良く田園の径を歩くとは。

要するにどこかの私立のミッション系の学園のそれも初等科（小学生）の最上級学年と見受けた。花模様の緑と桃色をあしらった鞄を肩から掛けていた。その奥床しい光景は東京下町の勇猛な、そして果敢な荒武者揃いの旧制中学男子生徒とは程遠いみめ美はしきこのご一行さまたち、しかも異性同士が手を繋ぐこの天使たちのすがすがしい姿に、思へば興奮気味だった。戦時中、どう考えても内心穏やかではなかった。上品で端正な、川崎での山あいでのこの学園はどこの子どもたちであったか。その該当校は!? 新聞社や放送局へ投書か、FAXで今でも問い合わせれば、恐らく探し出してくれるだろう。日時や場所はハッキリしているのだから。恐らく判明するのは間違いなかろう。……イヤ、今となってそんな不粋な真似はしたくない。懐かしい、心あたたまるすれ違った印象はその侭、そォっと青春の思い出として胸にしまっておきたいのである。人間だれしも美しい思い出を持ち、胸に抱いている筈。歴史の一駒である。

袖触れ合うも他生の縁とか、このすれ違った上品なこのご一行のことをその日一しょに行軍したわれらの仲間たちに、この史実の印象を何人かに戦後、質してみたがイヤ全然、覚えがない、全く記憶なし、第一、桝形城址など行軍したことすら忘れてしまっているという回答が実は大部分だった。然し一方ではイヤそう言われてみれば確かにすれ違ったような記憶があるにはあるという答えが二人ばかり返っては来たが。すでに六十年も昔である。思へば、昭和一桁生まれのこのみめ美はしき男女のご一行さまたち、長じて荒れ狂うこの国の戦火の中をどのようにくぐって来たのだろうか。他人ごと乍らこの人たちの戦後のさまざまな人生、親との別れ、友との別れ、更には、天上へ召された人もあろう。今、しあわせな老後を送っている人たちもあろう。

さまざまな人生はこのご一行さまたちばかりではない。われわれとても同じなのだが。

多感な十代なかば、丁度、十五才だった筆者の心情、なまじっか当時すでに文学を愛好し、短歌や俳句に手を染めていただけに、こんな文章になってしまったのだが……。

戦時中、下町の無骨ものが垣間みた一椀のロマンとして本稿をものにしたとお考え頂きたいし、必ずしもわが十期生全員の共通の思い出ではなく竹田一郎一人の、余計なお節介ごころのあらわれであるとお採り頂きたい。

戦前、世の中に〝男女七才にして席を同じゅうせず〟という箴言があって、明治・大正そして昭和初期生まれの人たちの人生にある程度の影響を与えたのも事実である。

×　×　×

昭和二十年八月、日本に恒久平和が到来して以来、半世紀余、日本は国の交戦権を放棄した新憲法に依り民衆の安定は保たれて、終戦の年復員した筆者も、平成十二年、齢七十五を数えるに至った。いま孫が二人。

筆者の両親は終戦の年、母戦災死、父は戦災病死、その悲運を乗り越えて昭和二十二年九月から母校の教壇に立った。以後六校勤務、定年まで勤めあげていささか世のため、人のために貢献すべく努力を捧げてきた次第である。及ばずながら残る余生を可能な限り世の為、人の為に尽くして行きたいと思っております。（終）

（江東区文化財保護推進委員、元東京都公立学校長・江東区越中島三―一―十二在住）

十七歳 今昔

十二期　内藤　登

昨今壊れた十七歳が世間を騒がせている。この年頃は昔も今も危険な未成年だ。ただ、置かれた環境が天と地ほどの違いがあった。

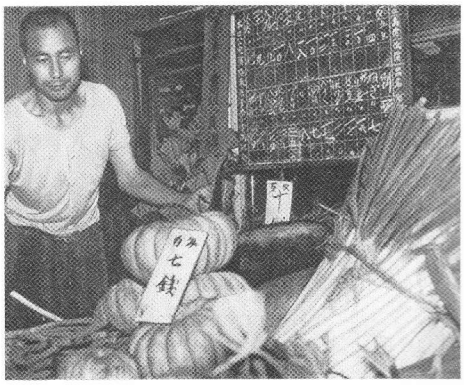
ボクの十七歳は昭和十八年―一九四三年―あの太平洋戦争の真っ只中、三商の五年生だった。

来る日も来る日も軍事教練で、校庭の地べたの上を這いずり回されていた。

また同期のなかからはひとりふたりと、予科練に志願し学校から巣立っていっていた。

それは死も、殺も、日常の場に訪れる荒んだ環境なのだ。それでも十七歳の無分別は当然のことと受け止めていた。

いまボクの脇に黒いボール紙の表紙に藁半紙の数葉を綴じ込んだ古ぼけた手帳が置いてある。昭和十八年七月十九日から二十四日まで、横須賀海兵団でカッター、手旗、結索の実習を受けた、海洋教練参加記録を記載してある「海洋班員携帯手帳」と表記された五十七年前のすすけた手帳である。



表紙裏には、三商の夏制服、グレーの背広に黒ネクタイ、坊主頭の十七歳のボクの写真がセピア色になって張られている。

「おいオマエ、その町人服はどこの学校だ」海兵団の衛門を入っていく数百人の少年の列のなかからボクは抓み出された。

中年の海軍士官がボクの顔を覗き込む。なるほど少年達の殆どはカーキーロの詰め襟か、白の開襟シャツである。背広は目立つ。

「都立第三商業学校であります」ボクは胸を張って答えた。

初代校長吉澤徹先生の信念に基づいて制定された制服である。何恥じるところあろう。

とまれ追いかえされることもなく、訓練服に着替えさせられ、教科は無事終了したのだった。

ヤングジェントルマンを養成せんとされた吉澤校長の先見は、正に数十年後の今日を看透されていたのだと感じ入る次第である。

平成11年度同窓会収支決算書

（自　平成11年4月1日　至　平成12年3月31日）

収入の部

前年度繰越金	8,714,974
会費（¥7,000×188人）	1,316,000
利息（普通預金）	3,436
雑収入（3学年解約利息寄付）	1,976
合計	10,036,386

支出の部

理事・評議委員会	99,829
校歌祭	120,525
同窓会報	346,500
慶弔費	50,000
事務局運営費	120,000
協議会参加補助	53,550
通信費	65,240
次年度繰越金	9,180,742
合計	10,036,386

次年度繰越金内訳　普通預金残高　¥9,180,742

監査の結果公正妥当であることを認めます。

平成12年4月21日

会計監査　森　光義

大嶽　清